

6月8日（月）サムエル記第二14章8～11節

「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」（11 節）

8節でダビデは、すぐに判決を出さず、まずは「家に帰りなさい。あなたのことで命令を出そう」と言って、先に家に帰そうとします。相手を打ち殺した方の息子はその命をもって自らの罪に報いることが妥当です。しかし、やもめのためには殺人を犯した息子を赦免して、家の世継ぎを残すことも考えるべきなので、容易に判決を出すことができなかったのでしょう。

そうしますと9節でテコアの女は、「王様。刑罰は私と私の父の家に下り、王様と王位は罰を免れますように。」と言います。恐らくダビデが判断に困っていると思ったのでしょう。ここで女が言ったのは、もし仮に殺人を犯した息子を赦免したとしても、そのことについての非難や罰は自分たちが引き受けるので、このことについて王家に何か害が及ぶことはないということと言おうとしたと思われます。この言葉でダビデは心を決めたのでしょう。「あなたに文句を言う者がいるなら、その人を、私のところに連れて来なさい。もう二度とあなたを煩わすことはなくなる。」と言い、この女を擁護する決定をします。つまり、殺人を犯した息子を赦免するという命令を下し、もしそのことで文句を言う者があれば、王である自分のもとに連れて来なさいというわけです。そして11節では、殺人罪を犯した自分の息子の罪を赦してくださるようにと願う女に、息子を自分が守ることで、息子に危害が及ぶことがないようにと約束しました。これは、確かに難しい判断であって、ダビデ王が判断に迷うのは分かる気がします。しかし、ここで大切なことは、相手を打ち殺した息子の罪は問われないのかということです。教会でも難しい判断を迫られることがあるでしょう。しかし、決して忘れてはならないことは、教会で罪を罪として扱わず、うやむやにしたり、まるでなかったことのようにするなら、後々禍根を残すことになるということです。難しい判断は、すべて主にゆだねつつも、私たちがなすべきことは罪をきちんと認めさせて、悔い改めへと導くことです。

6月9日（火）サムエル記第二14章12～17節

「しかし、神はいのちを取り去らず、追放されている者が追放されたままにならないように、ご計画を立ててくださいます。」（14節）

12節から「このはしために、一言、王様に申し上げさせてください。」とさらに発言の許しを求めます。それがダビデにより許可されますと、突然「あなた様はどうして、神の民に対してこのようなことを計られたのですか」と言いますが、恐らくダビデには何のことか分からなか

ったはずですが。それに続けて「王様は、先のようなことを語って、ご自分を咎ある者としておられます。王様は追放された者を戻しておられません。」と言います。つまり、ダビデは救いを求めた女の訴えを受け入れて、地から家を絶やさないために、殺人を犯した息子を赦免することを約束していますが、王自身はアムノンを殺したアブサロムを放っておいたままにしているのは、言っていることと実際のダビデの行状が矛盾しているのではないだろうかと言っているのです。さらに14節の「しかし、神はいのちを取り去らず、追放されている者が追放されたままにならないように、ご計画を立ててくださいます」とは、アブサロムがアムノンを殺害したことについて、彼の罪を暴こうと訴えたり、密かに彼の命を狙おうとするような者から神は守ってくださり、必ずアブサロムは無事にダビデのもとへ戻って来るはずだと言っているのです。15～16節は再び4節以降の自分の訴えに話しが戻っています。17節の「王様は、神の使いのように、善と悪を聞き分けられるからです。」とは、常に正しい判断のできる人ということです。そして、最後はダビデを祝福して話を閉じています。

この女は、明らかにダビデが話したことをもとにしてアブサロムが戻ってくるようにすべきだと言っています。アブサロムの罪を不問に付すことが神のみこころかどうか分かりませんし、アブサロムの罪を問わないことが王として正しい振舞いかどうか分かりません。しかし、ダビデが語った言葉を利用しながら、この女はアブサロムが帰って来るように誘導しています。私たちも言葉には気をつけなければなりません。そうすることで、都合よく未信者の人たちの策に乗せられたりしないようにすべきです。

6月10日(水) サムエル記第二14章18～24節

「よろしい。その願いを聞き入れた。行って、若者アブサロムを連れ戻しなさい。」(21節)

この女の話聞いていたダビデは、彼女が意図することと話しの出どころにここに来て気がつきました。そして19節で「これはすべて、ヨアブの指図によるのであろう」と尋ねます。その追及に対して女は、「確かに王様の家来ヨアブが私に命じ、あの方がこのはしための口に、これらすべてのことばを授けたのです。」と打ち明けました。そして、そのようにヨアブが指図した理由は、事の成り行きを変えるため、すなわち王とその息子のアブサロムの関係を改善するためであったということです。もっと言うなら、昨日見ましたように、アブサロムを王位後継者として王のもとに呼び戻すということです。

ダビデはヨアブが策をめぐらしたことについては何もとがめだてもせず、「よろしい。その願いを聞き入れた。行って、若者アブサロムを連れ戻しなさい。」と命じました。(21節) そし

て、ヨアブは言われたとおりにアブサロムをエルサレムに連れて来ましたが、王はアブサロムに会うことなく、そのまま家に帰らせました。

アブサロムは、自分のしたことについては何の罰も受けず、また自分のしたことを省みることもなく、そして全く悔い改める機会を与えないままアブサロムはエルサレムに帰って来ました。このことは、決してアブサロムにとって良い結果をもたらすとは思えませんし、神を信じる父親のすることとは思えません。神を信じる父親は、わが子が罪を犯したことを知ったなら、愛をもって諭し、真の悔い改めへと導かなければなりません。決して家庭や教会が子どもや若者の罪をうやむやにするようなことをしてはならないのです。

6月11日(木) サムエル記第二14章25～28節

「アブサロムは二年間エルサレムに住んでいたが、王の顔を見ることはなかった。」(28節)

25節にはアブサロムの容姿についての説明がなされ、特に「イスラエルのどこにも、アブサロムほど、その美しさをほめそやされた者はいなかった。」とあるほどでした。それと同時に、アムノンの亡き後、彼が最も有力な王位後継者でした。もしかすると彼はエルサレムに帰って来たなら、すぐにでも即位の話が出ると期待していたのかもしれませんが、しかし、二年間待ちましたが、全くそのような気配はありませんでした。これは推測にすぎませんが、王もアブサロムの罪を完全に赦し、彼を次の王とすべきかどうか悩んでいたのではないかと思います。いずれにしても、アブサロムは待ちきれなくなり、次の行動に移っていきます。

私たちも期待と忍耐をもって日々主の応答を待つ時があります。しかし、一向に応答がなければ私たちはアブサロムのように自分で行動を起こし、何とかして神の御前に出て、自分の訴えを聞いていただきたいと思うかもしれません。しかし、私たちの時の感覚と神様の時の感覚は全く異なります。「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」(ペテロの手紙第二3章8節)とあるとおりです。またダビデも王になる前に長くサウルに仕え、しかも命を狙われるような中を通されました。それでも彼は耐え忍び、最後には主の約束通りイスラエル全体を治める王となったのです。私たちが遅いと思っても主の目から見れば、決して遅くはないのです。私たちが神の時を待つために必要なことは、主に対する信仰です。特に、ダビデを王として立てられたように主は真実なお方なので必ず約束したことを成し遂げてくださる、主が時至ってみわぎをなされる時が最善の時だと信じる信仰です。私たちも主にあって信仰を増し加えていただきましょう。

6月12日（金）サムエル記第二14章29～33節

「アブサロムの家来たちは畑に火をつけた。」（30節）

ダビデもアブサロムに会おうとしませんでしたでしたが、自分をゲシュルからエルサレムまで連れて来たヨアブまでも彼に会おうとはしませんでした。アブサロムはヨアブを王のもとに送ろうとしてヨアブのもとに人を遣わしましたが、彼は来ようとせず、再度送りましたが、それでも来ようとしませんでした。すると、アブサロムは考えられない行動に出ます。それはヨアブの持っている大麦の畑に火をつけ、収穫物を燃やすというものでした。さすがにヨアブはアブサロムのもとに来て、そのようなことをした理由を問います。そうしますとアブサロムは、ヨアブを自分に会ってくれようとしめない王のもとに遣わし、なぜエルサレムへ連れ戻したのか、これだとゲシュルにとどまっていたほうがましだったと言わせたかったと言います。そこでヨアブは、アブサロムの願いを受けて、彼の代わりに王のもとへ行き、その結果アブサロムは王に会うことができなかったのです。

アブサロムの頭の中は、王に会いたいということしかなかったのかもしれませんが。そのためなら手段を選ばず、ヨアブの畑に火をつけるような暴挙に出ることもいとわなかったのです。私たちにもアブサロム的なところはないでしょうか。自分の願うとおりに物事が進まなければ、どんなこととしてでも主に自分の言うことを聞かせてやるとばかりに、強引に物事を進め、その結果として物事が思い通りに進めば、これが主のみこころだと思ったりすることはないでしょうか。そんな無茶なことをするはずはないと思われるかもしれませんが、わが身を振り返ってみると、主の目から見て、かなり強引で無茶なことをしていることもあるはずです。主の御前に謙遜になり、自分で強引に進んで行かず、主が道を開いてくださるのを待つことをおぼえましょう。

6月13日（土）サムエル記第二15章1～6節

「アブサロムはイスラエルの人々の心を盗んだ。」（6節）

14章33節で「王はアブサロムに口づけした。」とありますので、この時点で王とアブサロムは和解したのだらうと思われれます。そして1節に「その後」とありますが、またそれからしばらく年月が流れたのだらうと思われれますが、「アブサロムは自分のために戦車と馬、そして自分の前に走る者五十人を手に入れた。」とありますが、自分の前に走る者五十人とは王のボディガードで、戦車はこのような歩兵を従えるのを常としたいようです。ですから、アブサロム

も確かに王位継承者とみなされていたということなのでしょう。

アブサロムは、朝早くから門に通じる道のそばに立ち、さばきのために王のもとに来る者たちを呼び止め、3節では「王の側はあなたのことを聞いてくれる者はいない。」と言い、むしろ自分がこの国のさばき人となれば、私がその訴えを正しくさばくのと、ダビデ王制を批判して、人々の心がダビデから離れていくように仕向けています。また人が彼に近づきひれ伏そうとすると、彼は手を伸ばし、その人を抱いて口づけし、共感力があることを示そうとしました。そして、さばきのために王のもとにやって来る、すべてのイスラエルの人にこのようにしたとあり、アブサロムはイスラエルの人々の心を盗んだとは、ダビデからイスラエルの人々の心が離れて行くようにしたということです。

アブサロムは、周りからも次期王位後継者とみなされていたはずです。ですから、そのままダビデ王に仕えるならば何年か後にはアブサロムが王となったはずです。ところが彼はそれが待てなくて、なるべく早く王となるためにダビデに対して謀反を企てたのです。その手始めとして行ったことが、人々の心を盗むことでした。誰であっても焦って事を行うとしばしば失敗します。特に、われわれクリスチャンの場合は、焦らず、まずは主のみこころを伺い、じっくりとみことばに聞く時を持ちたいものです。私たちが何かをしようとするのは、それからでも決して遅くはありません。逆に焦って行動をすることで主のみこころを損ねないようにしたいものです。

6月14日(日) サムエル記第二15章7～12節

「この謀反は強く、アブサロムにくみする民が多くなった。」(12節)

アブサロムが軍事力を備え、民心を得るという動きをしている間に、さらに四年の月日が流れました。そして、自分がゲシュルにいたころに立てた誓願を果たすためにヘブロンへ行かせてほしいと頼みます。これまでいくらでもヘブロンへ行く機会があったと思いますが、今頃になってなぜ急にヘブロンへ行きたいと言い出したのかダビデは不思議に思わなかったのかと思われるかもしれませんが、「安心して行って来なさい」と送り出します。そして、ヘブロンへ行くというのはアブサロムにとっては父ダビデに対する謀反を決行するためでした。10節の角笛を鳴らすことは王の即位式で行われていました。ですから、角笛が鳴るのを聞いたら、アブサロムがヘブロンで王になったと言いなさいとイスラエルの全部族にひそかに人を遣わせて言いました。11節でアブサロムとともにエルサレムを出た二百人の人々はただ単に招かれて行った者たちで、何も知りませんでした。しかし、はからずも彼らはアブサロムの謀反に加担させられ

ることになったのです。12節ではダビデの助言者アヒトフェルを呼び寄せ、この謀反は強く、アブサロムにくみする民が多くなったとあり、まさに謀反へ向けてアブサロムは体制を整えていきました。

ただ単に招かれただけで何も知らされずアブサロムとともにエルサレムを出て行った二百人のように、私たちも思いがけないトラブルや問題にはからずも巻き込まれてしまうことがあるでしょう。しかし、大事なことは、そこで信仰を働かせて自分はどのように行動すべきか祈り、考えるべきであって、決して何も考えずそのような流れに流されてしまうことがあってはなりません。そもそも、そのようなことが起こってからあわてて、祈って考えるのではなく、普段からみこころを正しく行えるように祈っていることが大切です。